

講演・シンポジウムのご案内

● 研究委員会企画シンポジウム

第2日目 6月21日(日) 9:45～11:45 M206

学校におけるスクール・カウンセラーの役割とあり方
ースクール・ソーシャルワーカーとの関連で

話題提供者：光岡征夫（山梨英和大学）
 峯本耕治（弁護士）
 小林正稔（神奈川県立保健福祉大学）
司会 ：光岡征夫（山梨英和大学）
指定討論者：藤倉眞一（名取北高校・学校長）
 吉武清實（東北大学）

● 大会企画講演

第2日目 6月21日(日) 13:30～15:10 M206

岩手・宮城内陸地震後のコミュニティ再生

講演者 ： 佐々木豊志（くりこま高原自然学校 代表）
司会 ： 池田忠義（東北大学）
企画 ： 第12回大会準備委員会

● 大会企画シンポジウム

第2日目 6月21日(日) 15:20～17:00 M206

大学生・若者とコミュニティ

話題提供者 ： 佐々木豊志（くりこま高原自然学校 代表）
 末松和子（東北大学）
 布柴達男（東北大学）
コメンテータ： 高島克子（東京女子大学）
 北島茂樹（産業医科大学）
司会 ： 吉武清實（東北大学）
企画 ： 第12回大会準備委員会

研究発表一覧（口頭発表）

● 口頭発表 1

第1日目 6月20日（土） 10:00～12:00

M401

座長 黒沢幸子（目白大学）

O1-1 10:00～10:30

学校コミュニティへのナラティブ・アプローチ

ー「いじめ」に対するコミュニティへの予防的介入を巡ってー

岩手大学 田代 順

O1-2 10:30～11:00

不登校予防プログラムに関する評価研究

ースクリーニング・テストの作成・実施およびコンサルテーションの実施ー

埼玉県スクールカウンセラー 小栗貴弘

O1-3 11:00～11:30

学校コミュニティ支援「メンタルサポート・ボランティア」派遣プログラムにおけるアウトカム
評価ーボランティア活用による児童・生徒における問題行動の変化の検討ー

目白大学 田島佐登史

目白大学 黒沢幸子

目白大学 日高潤子

目白大学 平部正樹

O1-4 11:30～12:00

個別事例のロジックモデリングによるプログラム評価手法開発の試み

西武文理大学 安田節之

● 口頭発表 2

第 1 日目 6 月 20 日 (土) 10:00~12:00

M404

座長 久田 満 (上智大学)

O2-1 10:00~10:30

「わたしたちの居場所」の構成と維持
ーフリースクールでの葛藤に着目してー

メンタルクリニック・クラルス 木内彩乃
静岡大学大学院人文社会科学研究所 田辺 肇

O2-2 10:30~11:00

勤労者の被援助志向性向上への取り組み
ーメンタルヘルス不調者発症を未然防止するためにー

立教大学大学院現代心理学研究科 宇田亮一

O2-3 11:00~11:30

教員、事務職、医療職の CEAPS の各尺度値及び危機項目の検討

金沢工業大学心理科学研究科 池田紗矢
金沢工業大学心理科学研究科 塩谷 亨

O2-3 11:30~12:00

筋弛緩法の実施と CEAPS の St 尺度値の変化：対象者 21 名を用いて

金沢工業大学心理科学研究科 橋本尚子
金沢工業大学心理科学研究科 塩谷 亨

● 口頭発表 3

第 1 日目 6 月 20 日 (土) 13:30~15:30

M401

座長 高畑 隆 (埼玉県立大学)

O3-1 13:30~14:00

傾聴ボランティアに関する実践研究 (2)
—行政機関主催の養成講座のあり方の検討—

同朋大学 目黒達哉

O3-2 14:00~14:30

精神保健医療福祉の地域格差にコミュニティ心理学は何ができるか

東北文化学園大学 氏家靖浩

O3-3 14:30~15:00

米国における Community Health worker
—地域における保健・福祉サービスの“民”の力—

国立がんセンター 河村洋子

O3-4 15:00~15:30

コモンズの保全を目的とした共同統治システムの成立過程
—沖縄県恩納村における行政・漁協・一般住民の正当性—

関西学院大学 野波 寛
大阪国際大学 加藤潤三
同志社大学 中谷内一也

● 口頭発表 4

第 1 日目 6 月 20 日 (土) 13:30~15:00

M404

座長 大石幸二(立教大学)

O4-1 13:30~14:00

看護師における心理専門職への援助要請に関する研究 (1)

—看護師援助要請意欲尺度の作成—

上智大学 久田 満

上智大学 大嶋みどり

O4-2 14:00~14:30

看護師における心理専門職への援助要請に関する研究 (2)

—援助要請態度と援助要請意欲の関連—

上智大学 大嶋みどり

上智大学 久田 満

O4-3 14:30~15:00

医療現場におけるコミュニティ支援プログラムの展開の試み

—地域がんセンター緩和ケアチームとのコラボレーション—

山梨英和大学 黒田浩司

● 口頭発表5

第1日目 6月20日(土) 15:40~17:10

M401

座長 三枝将史(埼玉県所沢児童相談所)

O5-1 15:40~16:10

児童養護施設におけるスタッフと虐待を受けた子どもの家族との関係構築

静岡市児童相談所

篠田久美

静岡大学大学院人文社会科学研究所

田辺 肇

O5-2 16:10~16:40

子ども虐待における養育者と児童相談所臨床家の対峙的關係

—アウトリーチから始まるコンフリクトの構造から—

東京大学大学院教育学研究科

高岡昂太

O5-3 16:40~17:10

若年無業者の職業的自立における現状と臨床心理的ケアの必要性

—ふくい若者サポートステーション調査報告より—

立命館大学大学院文学研究科

川中栄奈

ふくい若者サポートステーション

梅田隆行

福仁会病院

田中伸晃

日本セルフセンター

清島 眞

● 口頭発表6

第1日目 6月20日(土) 15:40~17:10

M404

座長 加賀美常美代(お茶の水女子大学)

O6-1 15:40~16:10

短期留学生の地域社会への参入

国際教養大学 阿部祐子

O6-2 16:10~16:40

大学院留学生の研究環境に対するコミュニティ感覚

— 研究生活における困難さとの関連を探る —

群馬大学 国際教育・研究センター 園田智子

O6-3 16:40~17:10

日本人海外移住者の日本人同士のつきあいとコミュニティ形成

: イングランド東中部に住む日本出身女性たちの生活から

京都光華女子大学 石盛真徳

研究発表一覧（ポスター発表）

● ポスター発表A

第1日目 6月20日（土） 10:00～15:30 6F大ホール

責任在席時間	P1、P3、P5、P7、P9	10:00～11:00
	P2、P4、P6、P8、P10	11:00～12:00
	P11、P13、P15、P17、P19	13:30～14:30
	P12、P14、P16、P18	14:30～15:30

P1

若年無業者の自立支援における臨床心理実践のあり方についての一考察
ー心理的支援枠組みの構築から地域活動までを振り返ってー

とちぎ若者サポートステーション 佐藤良香

P2

バーンアウトへの介入

: 仕事とうまくつきあうための6つの戦略の試行

慶応義塾大学 増田真也

P3

レバノンのパレスチナ難民キャンプにおける心理社会支援協働プロジェクト

ー「補習クラス」支援スタッフへの「心理サポート研修」を介した後方支援活動を中心にー

立教大学現代心理学研究科 箕口雅博

立教大学現代心理学研究科 大橋 智

NPO 法人パレスチナ子どものキャンペーン 中村哲也

NPO 法人パレスチナ子どものキャンペーン 田中好子

P4

NPO の難民支援とコミュニティ感覚の生成

NPO 法人 ACC 危機の子どもたち・希望

立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科 松永知恵子

P5

ゴミのポイ捨て行動への行動コミュニティ心理学的介入

立教大学大学院現代心理学研究科

大橋 智

立教大学文学部心理学科

小林勇太

P6

地域通貨の効果測定

—ソーシャルサポート尺度を用いた検討—

関西学院大学大学院文学研究科

西崎晃輔

関西学院大学文学部

嶋崎恒雄

P7

NICUにおける臨床心理士の関わりを導入した試み

—NICUというコミュニティへの関わりを試みた1年目の経過と看護師への調査—

独立行政法人 国立病院機構 福山医療センター

飯塚暁子

P8

子育て・保育現場へのコミュニティ心理学的介入

—保育士に対する心理教育プログラムの実践とその評価研究—

志木市立教育サポートセンター

須賀田真理

P9

保育所・保健センターにおける児童虐待への予防的アプローチについての一考察

—保健師・臨床心理士の協働による母親支援—

立教大学大学院

米山祐子

立教大学

箕口雅博

P10

不登校の「中1ギャップ」についてのコミュニティ心理学的検討

日本女子大学

高橋美枝

日本女子大学

小出ひろ美

日本女子大学

北林幸子

日本女子大学

福島里美

日本女子大学大学院

銚谷 路

日本女子大学

福島 円

日本女子大学

鶴養美昭

P11

行政の実施する不登校児童生徒支援プログラムへの実践的介入
—プログラム評価の「入り方」とその実際—

志木市立教育サポートセンター 山本耕太

P12

職員室とはいかなる環境か？
—中学校における職員室風土を探る—

北海道大学大学院教育学院 佐藤昭宏

P13

学校という場を通してのコミュニティづくりに関する調査研究（1）
—学校への地域住民参加を中心に—

大分大学 深尾 誠
大分大学 山崎清男
大分大学 中川忠宣

P14

学校臨床におけるニューカマーの児童生徒への心理社会的支援の検討
—学校スタッフ・支援団体と子ども達へのインタビューを通して—

目白大学大学院 五寶美詠子
目白大学大学院 黒沢幸子

P15

日本語学校で受けたサポートと就学生の主観的幸福感の関係についての検討
：マルチメソッド・アプローチによる分析

東京大学 邱 焱

P16

高齢者の抑うつと身体的健康、ソーシャル・サポートとの関連
—全国高齢者調査データの二次分析—

一橋大学大学院社会学研究科 源氏田憲一

P17

特別支援教育にかかわる支援員への研修プログラムの提案

－PAC 分析によって抽出された活動継続要因に注目して－

公立小学校スクールカウンセラー

中村香奈子

P18

小学校通常学級における特別なニーズのある子に対するクラスメイトの関わり

東京女子大学大学院

黒住早紀子

P19

写真投影法による危険認知の把握（5）

－子どもの発達による危険・不安認知の違い－

関西学院大学社会学部

岡本卓也

関西学院大学大学院社会学研究科

林 幸史

関西学院大学社会学部

藤原武弘

コミュニティ心理学からみた、
学校におけるスクール・カウンセラー (SC) の役割とあり方
—スクール・ソーシャルワーカー (SSW) との関連で—

話題提供者：光岡征夫 (山梨英和大学)
 峯本耕治 (弁護士)
 小林正稔 (神奈川県立保健福祉大学)
司会 ：光岡征夫 (元 山梨英和大学)
指定討論者：藤倉眞一 (宮城県立名取北高等学校 校長)
 吉武清實 (東北大学)

企画趣旨

皆様もご存じのように、平成20年度から各都道府県教育委員会において、これまでのSC事業に加えて、新しい学校サポートシステムであるSSW事業が始まったが、SSWへの教育現場での反応や期待はとても大きいものがある。

このシンポジウムのねらいは、SSWとの関連において、平成8年度から広がってきて歴史も重ねているSCの役割とあり方について、コミュニティ心理学の立場から、あらためて理論的にも実際的にも検討し、その役割とあり方を明確にし、学校教育現場での混乱を防いで両者の協力・協調の方向を検討し、今後の方向を探ることにある。

そのために、学校教育臨床やSSWの教育・研修の現場で活動してこられた先生方に、その経験やその考え方を話していただき、それらをコメンテータの先生方に、SCやSSWを活用する学校現場の立場から、また、コミュニティ心理学的立場からご検討いただき、まとめていただく場を作りたいと考えている。

司会・話題提供者：光岡征夫 (元 山梨英和大学、山梨県臨床心理士会学校関係理事、山梨県SC、元東京都教育研究所教育相談員)

最初に、簡単にSCやSSWが創設されてきた時代背景や考え方について述べてみたい。またSCの考える相談活動、筆者が実際に行っている学校臨床活動(中学校)について、その内容や対象、方法や考え方等について語ってみたい。またその相談にあたって感じている問題や限界、SSWへ

の期待等についても触れてみたい。

話題提供者：峯本耕治（弁護士、大阪府・滋賀県 SSW スーパーバイザー、大阪府児童虐待等危機介入援助チーム委員、教師・親・子どものための（TPC）教育サポート研究会理事長）

学校教育に関連して、子どもの最善の利益を護る立場から弁護士としてどのような活動を開始しているのか、また、SSW 事業のスーパーバイザーとして、どのような取り組みを行い、ケース会議参加・スーパーバイズ・研修等にあたっては、具体的にどのような点に留意しているのか、その中で見えてきた SSW と SC の連携のあり方と課題、SC への期待等について話してみたい。

話題提供者：小林正稔（神奈川県立保健福祉大学、臨床心理士、NPO 神奈川県スクールカウンセラー協会監事、神奈川県教育委員会 SSW 運営委員会委員、横浜市教育委員会スクールスーパーバイザー、横須賀市児童相談所 SV）

これまで長く神奈川県で地域の児童相談所・児童養護活動にかかわり、更には臨床心理士としても、SC のコーディネータ、スクールスーパーバイザーとして学校教育臨床にかかわり、同時に教育・福祉行政全般に、これまでかかわって、また現に関与している立場から、地域社会や学校システムでの SC 並びに SSW のあり方について、これまでの歴史や地域での現状に触れながら、今後の方向などについて検討してみたい。

指定討論者：藤倉眞一（宮城県立名取北高等学校 校長）

学校現場で、SC 活用を含む相談体制のあり方を模索してきた立場から、これまでの SC 活用事業で見えてきている SC という職種の利点と課題を整理しつつ、今後の SC 等の外部性をもつ専門職と教員のコラボレーションのあるべき姿について、学校の相談体制の充実化という視点から、話題提供の方々の話も踏まえ、討論の一助となる事を願って私見を述べてみたい。

指定討論者：吉武清實（東北大学高等教育開発推進センター教授、学生相談所カウンセラー）

諸先生方のお話から、SC のあるべき姿、とくに SSW との役割分担と連携のあり方について、コミュニティ心理学的立場からのまとめ、検討、考察を行う。

岩手・宮城内陸地震後のコミュニティ再生

講演者：佐々木豊志（くりこま高原自然学校 代表）

司会：池田忠義（東北大学）

企画：第12回大会準備委員会

講演要旨

くりこま高原自然学校は1996年に栗駒山の高原地帯にある耕英地区に開校した。耕英地区は戦後、満州からの引揚者が開拓した地域で今は40戸ほどの小さな集落である。ブナの原生林を伐採し、炭焼き、ナメコ・高原イチゴ・高原大根の栽培、岩魚の養殖、近年は寒冷な気候を利用した生花の栽培と時代を追って様々な取り組みをしてきた。

昨年6月に発生した「岩手・宮城内陸地震」は、震源域に近い耕英地区に大きな被害を与えた。耕英地区に通じる全ての道は寸断されて孤立し、地区内にある駒の湯温泉は甚大な被害と犠牲者を出した。被災しても生活する力がある自然学校や地区住民は避難するつもりはなかったが、行政から41戸100名余りの全住民への避難指示が出され、全住民が断腸の思いで山を降りた。そうしてほぼ一年にわたり、地域を離れた避難生活を送ることとなった。

個人的には、阪神淡路大震災の救援ボランティアの経験が生きることとなった。震災からおおよそ一ヶ月後には、耕英地区全住民による「くりこま耕英震災復興の会」を組織した。その後はこの組織を通じてコミュニティの再生に取り組んできた。

この震災によって耕英地区というコミュニティに何が起き、何が生まれ、行政や関係機関、避難住民の中にどんな意思決定が生まれたか、コミュニティの再生にあたってどんな問題があらわになったのか、今日までの経過を振り返り、この地域のコミュニティのあり方や課題について考えてみたい。

佐々木豊志氏 略歴等

〔略歴〕

岩手県遠野市出身、盛岡市育ち。現在は宮城県栗原市栗駒在住。

高校卒業後、1996年、筑波大学体育専門学群入学。2年次から第一専攻：野外運動、3年次から第二専攻：体育原理。これらの学業と並行して、幼少年キャンプ研究会・野外活動研究会・山岳部の活動にも取り組み、「濃密なアウトドアな生活を送る」中で、野外運動や野外教育に関する学習と実践を重ねる。

1982年、放送局関連会社に勤務し、野外教育事業に関わる。その傍ら、日本アウトドアネットワーク（JON）の設立にも関与し、1995年の阪神淡路大震災に際しては、ボランティア先遣隊として支援活動を行う。

1997年、「くりこま高原自然学校」を開校し、様々な野外教育の実践に取り組む（以下に詳述）。2008年6月、岩手・宮城内陸地震で被災し、栗駒山（耕英）からその麓（松倉）へ移る。被災後は、下山を余儀なくされた耕英地区を始め、栗駒のコミュニティ再生に向けて尽力する。そのプロセスを自身のブログ（「豊志のくりこま高原物語」）で発信し続け、それが全国からの支援を得る大きな原動力となる。そして、同ブログ(http://blog.canpan.info/master_kkns)は、2008年、「CANPAN第3回ブログ大賞」グランプリに輝いている。

また、宮城大学大学院事業構想研究科修士課程（2004年～2006年）を経て、2009年4月、同研究科博士課程に入学し、くりこま高原自然学校の実践に基づく研究に取り組む。

〔くりこま高原自然学校の沿革〕

1996年、約6年間の準備期間を経て、開校。エコ・ビレッジ構想に基づき、「くりこま高原・暮らし環境実験村」として、手作りで生活環境を整えつつ、青少年のための野外教育事業や自然体験プログラムを実施。

2003年には、NPO法人くりこま高原・地球の暮らしと自然教育研究所を設立。

これまでの主な活動として、文部省委嘱事業『長期子ども自然体験村』くりこま高原パイオニアキャンプ（1999年～）、WAM（独立行政法人福祉医療機構）助成事業「不登校・ひきこもりのための長期寄宿の自然体験学校」（2000年～）、「森のようちえん」（2005年～）、厚生労働省委嘱事業「若者自立塾」（2006年～）等がある。

2008年6月、岩手・宮城内陸地震により大きな被害を受け、スタッフは避難を余儀なくされるが、それを契機に本校に次いで松倉校を開校し、活動を続けている。

大学生・若者とコミュニティ

話題提供者 : 佐々木豊志 (くりこま高原自然学校 代表)

末松和子 (東北大学)

布柴達男 (東北大学)

コメンテータ : 高島克子 (東京女子大学)

北島茂樹 (産業医科大学)

司会 : 吉武清實 (東北大学)

企画 : 第12回大会準備委員会

企画趣旨

今日、従来のしくみのひずみと行き詰まりが、社会のさまざまなシステムについて指摘され、social change (諸々の社会システムの作り直し) が強く求められる時代状況にある。一方に、学校における競争からはずれ、不適応状態、あるいはニート・ひきこもり状態となる学生・若者の存在がある。そこには、メンタルヘルスの問題や格差と貧困の問題も絡むようになってきている。各システムの構成メンバーが自らシステムの change (作り変え) にコミットメントするようになることが望ましいことだが、そのような文化的風土的成熟には、コラボレーションを模索する体験が当事者を越えて共有されて、集団として記憶されていく必要があると思われる。この作業は、たてのつながりとしても、すなわち中高年世代と若者世代との間でも不断に行われていく必要がある。コミュニティが抱える問題への大学生・若者のコミットメントと世代間のコラボレーションという大きな課題について、くりこま自然学校と東北大学というふたつの小さなコミュニティにおけるとりくみの事例をもとに、皆様と考える機会とすることを願い、企画した。

話題提供者 : 佐々木豊志 (くりこま高原自然学校 代表)

くりこま高原自然学校は自然体験活動や冒険体験活動を通じて青少年の健全育成を行う民間の野外教育事業所として活動を始めた。主催する長期キャンプに不登校が参加したことをきっかけに不登校・引きこもり・ニートのための長期寄宿制度を始めた。以後、8年間で約130名の寄宿生を受け入れて、自然環境や農山村の社会環境を活用した生活体験・自然体験を活かして、悩みを抱える青少年の課題解決を支援してきた。特に、冒険教育という体験教育の手法「未知のこと、

結果が保証されないことに自分の意志で一步踏み出すことができる人づくり」をベースに取り組んできた。平成18年からは厚生労働省からの委嘱事業であるニートの就労支援の「若者自立塾」も実施している。近年は教育だけでは解決に限界があるケースを他の関係機関との連携のあり方を模索している。

今回は、ホリスティックな視点で、自立を支援するための新たな連携を検討したい。

話題提供者： 末松和子(東北大学大学院経済学研究科准教授)

報告者は、東北大学大学院経済学研究科国際交流支援室で、留学生への学習・生活・就職支援、日本人学生への留学相談・留学予備教育、国際教育、国際交流等を担当し、種々のニーズに応える取り組みを行ってきた。日本では、まだ大学生の大学コミュニティへのコミットメントは低く学生のコミットメントを引き出す仕掛けが必要とされる状況にある。東北大学において報告者がこれまで取り組んできた事例を紹介しながら、大学生のコミュニティへの関わりの問題をフロアの皆さんとともに考える機会としたい。

話題提供者： 布柴達男(東北大学大学院生命科学研究科准教授)

東北大学では男女共同参画の取り組みの一つとして、女性大学院生による「サイエンス・エンジェル (SA)」事業を進めてきた。この問題の背後には、大学院に進んではじめて気付くことになる男性によって作られてきた研究者の研究・ライフスタイルや理系研究室風土をどう変容させていくか、またマイノリティとなって孤立し研究職の夢を断念することになりがちな女性大学院生をどうエンカレッジしていくかという課題が関係している。サイエンス・エンジェルの活動は、理系女性学生のコミュニティを築くもの（横のつながり）であり、後輩高校生にロールモデルを提示するもの（縦のつながり）であった。SAへの支援の係わりから見えてきた事柄を皆様に紹介し、コミュニティへの学生のコミットメントの問題を考えてみたい。

コメンテータ： 高嶋克子（東京女子大学）

北島茂樹（産業医科大学）

大学生・若者とコミュニティのシステムの change（作り変え）という問題に関して、話題提供者からの報告をもとに、コミュニティ心理学的立場からの議論を試みたい。